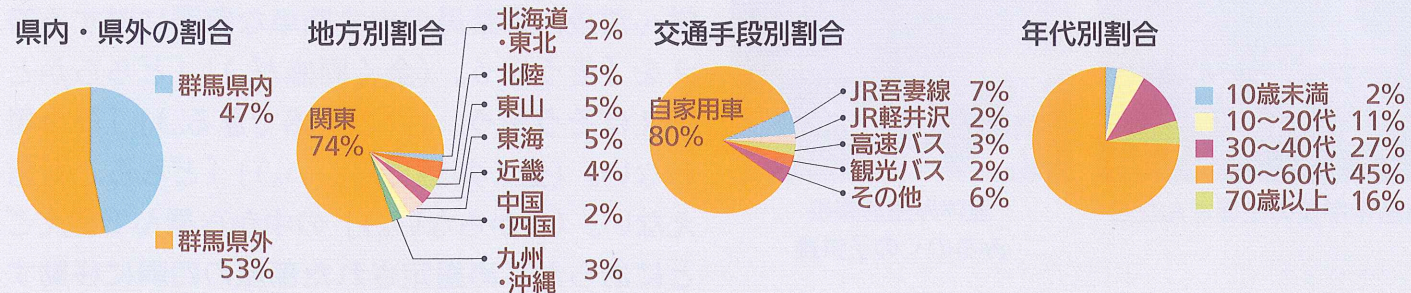


# おかげさまで開館から半年・ご来館の状況

当館は、9月末で開館からの半年を無事に迎えることができました。おかげさまでオープン以来の来館者数は、述べ5,837人（1日平均53.6人）となりました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

ご来館の状況（平成26年9月末現在）



## お客様の声（来館者アンケートより抜粋）

- ◎これほど沢山の資料がわかりやすく展示されているとは思わず、見入ってしまった。
- ◎映像でのレクチャーがあり、良かった。
- ◎25分のガイダンス映像は内容が濃く、時間を感じさせなかった。
- ◎上映のとき字幕があつてよく分かった。
- ◎展示の方法が具体的で、説明もわかりやすかった。
- ◎見学して病気の詳細や差別の実態が良く分かった。もっと多くの人に見て欲しいと思う。
- ◎病気は自分のせいではないのに差別されたり、他の人たちも無関心でいたのが一番よくなかった。
- ◎今のいじめの構図にも似たようなものがあると思う。
- ◎多感な思春期の子どもたちに命の大切さ、人の命の大切さについても学んで頂きたい。
- ◎中学生の子も学校からハンセン病の冊子をもらったりしていたが、そんなことより、こういう所へ訪れさせた方が良い。
- ◎誤解と無知による不公平、差別の実態を感じた。
- ◎知らないでいたことを申しわけなく思う。
- ◎事実を後世に正しく伝え、差別や偏見のない世の中をつくらなければならぬと強く思った。とても貴重な資料館だと思う。

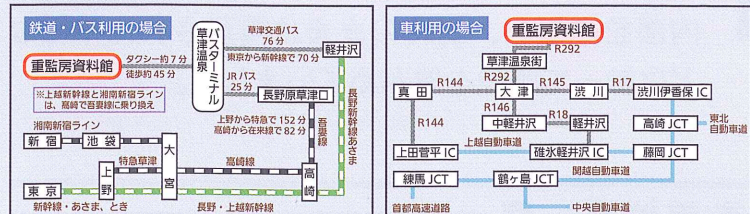
【この他にも、多くの皆様からご感想をお寄せ頂きました。有難うございました。】

## ご利用案内・アクセス

入館料…無料

※個人見学は4月26日から11月14日の期間となりますのでご承知おきください。

区分	フルオープン期間（4月26日～11月14日）	団体専用期間（11月15日～4月25日）
受付対象	個人及び団体	団体・学校 予約のみ
開館時間	午前9時30分～午後4時00分 （最終入館午後3時30分）	午前10時00分～午後3時30分 （最終入館午後3時00分）
休館日	毎週月曜日・火曜日（祝日の場合は翌日） 国民の祝日の翌日、館内整理日	毎週土曜日・日曜日 国民の祝日、年末年始、館内整理日

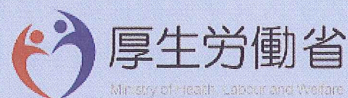


## 重監房資料館だより「くりう」第2号【季刊】

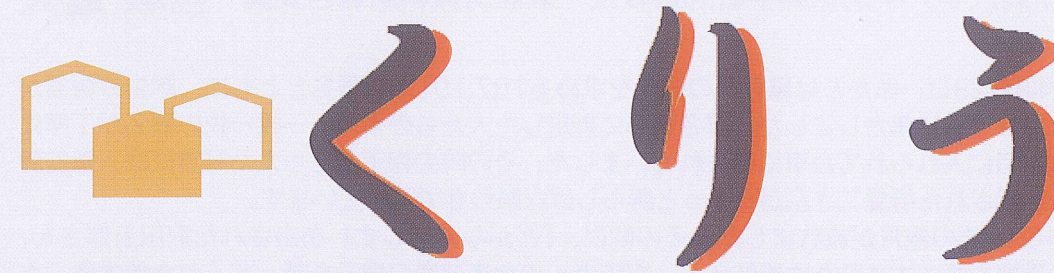
発行日：平成26年（2014年）10月1日／企画・編集・発行：重監房資料館

〒377-1711 群馬県吾妻郡草津町草津白根464-1533 TEL：0279-88-1550 URL：http://sjpm.hansen-dis.jp/

重監房資料館はハンセン病をめぐる差別と偏見の解消を目指して国（厚生労働省）が設置した国立の資料館で入館は無料です。

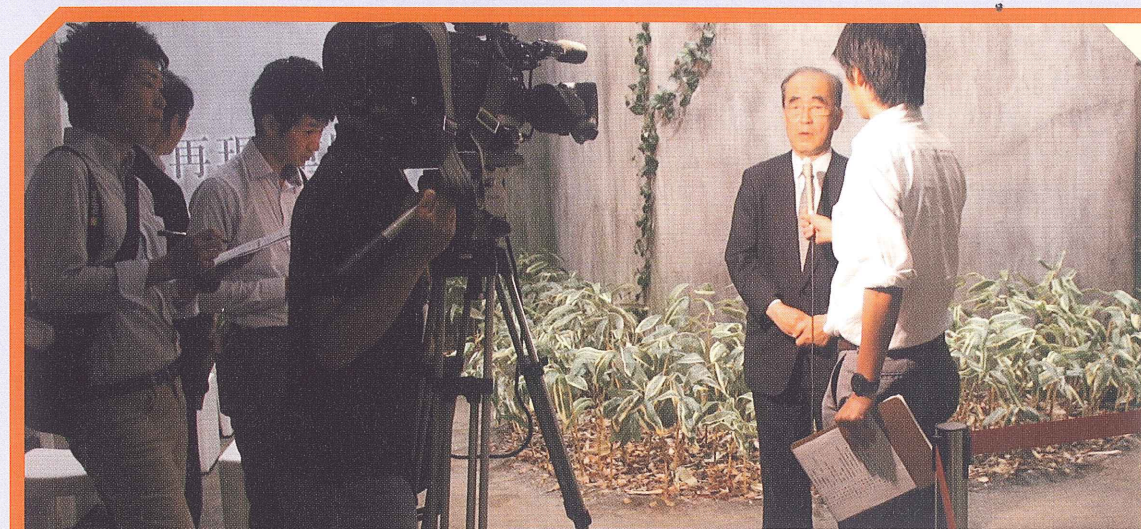


# 重監房資料館だより



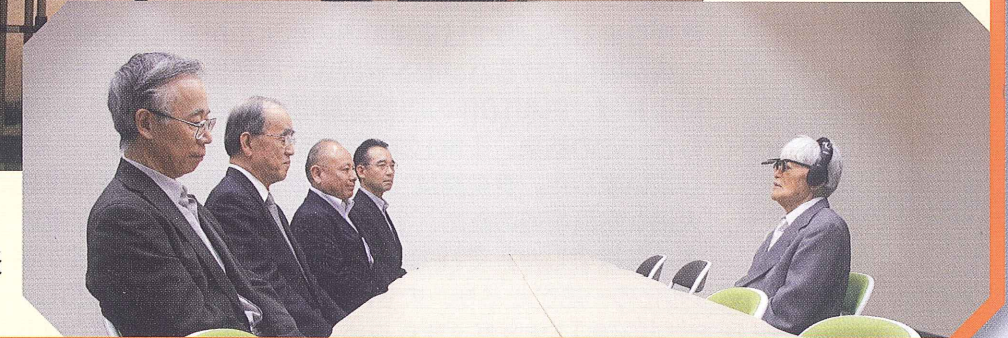
KURIU

## 楽泉園の藤田会長が再発防止検討会有識者と懇談



視察後、地元テレビ局のインタビューに答える検討会の多田羅座長

検討会メンバーと懇談する藤田自治会長



9月4日と11日の両日に分かれ、厚生労働省の有識者会議「ハンセン病問題再発防止検討会」の座長を務める多田羅浩三大阪大学名誉教授ら有識者計7名が当館と重監房跡地の視察に訪れました。

一行は納骨堂に献花した後、館内のレクチャー室で楽泉園入所者自治会長の藤田三四郎さんと懇談して意見交換しました。

視察後、多田羅座長は地元テレビ局のインタビューに対し「実際に見て想像以上のものを感じた。」と述べ、当館を多くの人に見てもらうことが二度とハンセン病問題のような過ちを繰り返さないことにつながるとの認識を示しました。



# 10万人署名から10年



新潟大学大学院保健学研究科教授・重監房資料館運営委員 宮坂 道夫

2004年6月29日、私たちは重監房の復元を求める107,101筆の署名とともに、厚生労働省が入る庁舎のロビーに集合しました。署名集めに奔走した人たちの手で、一枚一枚の署名が丁寧に束ねられ、箱に入れられて台車に積み込まれていました。その時の様子を撮らせた写真には、重監房の復元を提唱された笹雄二さんがちょっと誇らしげな顔つきで写っています。

あれから10年の歳月が流れました。その間に、『とがなくてしす』を出された沢田五郎さん、重監房の恐怖を語ってくれた中原弘さん、収監者への食事運搬の様子を語ってくれた鈴木幸二さんなどが亡くなりました。そして、資料館の開館を見届けるかのように、今年5月11日（熊本判決の日です）に、笹さんも旅立たれました。その前日、私たちは草津で行われたハンセン病市民学会で、重監房資料館の意義をテーマにしたシンポジウムを行っていました。コーディネーター

だった私は、シンポジウム終了後に病床の笹さんに「無事に終えました」とご報告しました。笹さんは何も言わず、澄んだ瞳で私の目をじっと見つめておられました。

資料館が開館して、私は楽泉園の藤田三四郎さんと全生園の佐川修さんに、おそろおそろ、「ご覧になって、どうですか」と尋ねました。お二人が口を揃えて「当時のまんま」と言われるのを聞いて、復元に賭けてきた人たちの思いが無駄にならず、切れかけていた糸をどうにか繕って未来の世代へと渡すことができたような気がしました。

重監房をその目で見たことのあるハンセン病回復者は、とても少なくなりました。彼らから直接お話を聞いた私たちのような世代も、やがては消えていきます。人が消えれば、語り継ぐべき言葉と資料が残されるのみです。幸いにも、この資料館には重監房のことを知らなかった人の想像力に訴えかける仕組みがあります。この貴重な場所を誠実に運用していくことが、私たちにとっての大切な課題だと考えています。

## 特別病室（重監房）の再現にあたり思うこと



国立療養所栗生楽泉園入所者自治会 会長 藤田 三四郎

平成26年4月30日に重監房資料館がオープンしました。この施設の目的は、過去の事実を知り、人権について考える機会を持つことです。入館者は平成26年9月30日現在で5,837人超になりました。今では草津町内のホテルから直接来館する人も多くなっています。

我が国におけるハンセン病問題には悲惨な歴史がありました。長島愛生園50年史「隔絶の里程」によれば、昭和10年の収容定員890人を実に273人も超過した1,163人も人が入所していました。この結果、1室12帖半の部屋が定員4人のところ8人になり、ついに10人にまでなっていました。愛生園は「相愛互助」の名による患者作業によって運営が維持されていましたが大幅な定員超過のため、1人あたり僅か6銭ほどの作業賃さえ枯渇して不足分を食糧費から捻出する有様でした。それでも所長は「1食を割き、半座の褥を譲る。」をスローガンにこれを強要

しました。入所者の処遇は悪化の一途をたどり、まさに入所者撲滅政策をむき出しにしたものだったのです。

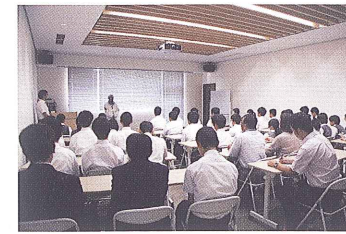
ついに耐えかねた入所者は翌昭和11年8月「所長やめろ！」と全員が決起しました。世に言う「長島事件」の勃発です。しかしこの闘いも警察力によって弾圧されました。入所者の怒りの炎が自身に及ぶのを恐れた所長は全国所長会議を開き、内務・司法両省に「不穩癩患者取締」のため「特殊監禁所設置・行刑政策の徹底」を要求しました。

栗生楽泉園ガイドブックによれば、その結果2年後の昭和13年、国立第2号の当園に全国のハンセン病患者を対象とした懲罰施設「特別病室」が設置されたのです。特別病室は昭和14年から昭和22年まで使われ、収監者92名、凍死・自殺者22名と言う悲惨な結果をもたらしました。昭和22年10月に一松厚生大臣の使用禁止命令が出てからは永きに亘り放置され熊笹や雑草が生い茂っていましたが、昭和57年6月から楽泉園の開園50周年に合わせて職員と入園者が正門から特別病室までの間の清掃作業を2か月間実施しました。そして22名の犠牲者の霊を慰めるため、特別病室の玄関跡に「重監房跡地」という碑を建立したのです。また、3年をかけて編纂した50年史「風雪の紋」を各療園関係者に配布したところ、ある園の入所者の方から「自分の兄も特別病室に収監されていた。」との書簡が届き、収監者は1人増えて93名、うち死亡者は23名になりました。

重監房の再現は厚生労働省健康局疾病対策課、全原協、全療協の粘り強い運動の結果実現したものです。二度とこのような悲惨な出来事が起こらないように願い、人権研修センターであるこの重監房資料館を、国の責任において未来永劫管理、運営すべしと思っています。

# 夏休み・多くの学生や生徒の皆さんが人権学習に訪れました。

## ・学芸員と共に考える4コーナーゲーム



六合中学校の生徒さんたち



夏休み生活楽校  
みちのくの子供達

レクチャー室で楽泉園やハンセン病の歴史を学んだ後、学芸員の出す簡単な質問に対する答えを「そう思う。(全く同感だ。)」 「どちらかと言えばそう思う。(少し共感できる。)」 「そう思わない。(全く共感できない。)」 「どちらとも言えない。(わからない。)」の中から選んで答えごとにあらかじめ指定された部屋の四隅に移動する

正解のないゲームです。その時自分がどう感じたのかを見つめることが目的なので答えは人によってバラバラです。

## ・模型と再現映像で独房内の様子を学ぶ



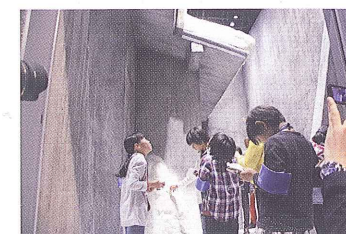
桐生准看護学校の  
学生の皆さん



埼玉県立本庄高校の  
生徒の皆さん

特別病室（重監房）を20分の1の縮尺で再現した模型の周りに集まり4.5mと言われる高い扉に囲まれた内部の構造や環境、収監された人々のプロフィールなどについて学芸員の説明を受けた生徒の皆さんは、再現映像を見て独房内の収監者の様子を学びました。

## ・実寸大で再現された房内での体験学習



再現された房を取材する  
子供記者たち



足利短期大学の  
学生の皆さん

実寸大で部分再現された特別病室（重監房）の見学では、生徒さん自身が大きな扉の前で門（カンヌキ）を開けたり、監禁室だった独房の中に入って壁に描かれた落書きや殺風景な部屋の内部を観察し、当時のままに再現された布団などに触って感触を確かめていました。

## 9月までの来館校等一覧

中之条町立六合小学校・中之条町立六合中学校・白根開善学校・京都府立京都八幡高等学校南キャンパス・群馬県立桐生高等学校地歴部・埼玉県立本庄高等学校・渋川看護学校・足利短期大学看護学科・桐生准看護学校・富岡准看護学校・藤岡准看護学校・新島学園短期大学・会津短期大学・足利工業大学看護学部・明星大学人文学部福祉実践学科・佐久大学・立教大学アコライドギルド・慶應義塾大学医学部EIP実習・金沢大学・群馬大学保健学科・群馬大学社会情報学部・群馬医療福祉大学・高崎健康福祉大学・夏休み生活楽校（草津楽泉園とみちのくの子どもをつなぐ会）・大宮聖愛会ファミリーキャンプ・上毛新聞子供記者